

我が切手収集

小学校時代からはじめ切手研時代を頂点にした切手収集はどうか初老を迎える今もかすかに続けられている。形ばかりの収集を続けられているのは1枚の切手との出会いのおかげである。切手研入部以来、エリザベス女王の切手に魅せられていた頃、切手研メンバー青柳君から紹介されて加入した1ドルクラブで届いた1通の封書に張られたオーストリアの美術協会100年記念切手が目に飛び込んできた。色彩は単色で地味だが渋い感じで凹版印刷された大きめ切手は芸術品と思われた。即、その差出人である10歳年長の男性と文通がはじまり現在まで続いている。手持ちの切手の交換からはじまり、年に2,3回新たに発行された切手を送るというパターンが続いている。未使用であればそれほどの苦労はないが使用済みの美品の希望をかなえるためには絶えず郵便物に気を配り、年末には不足分を切手商でそろえてクリスマスカードに添えて送ることが30年近く続いている。このことが我が切手収集を継続させる大きな力になっている。おかげで我が切手収集はオーストリアと日本切手を中心に終わらずにいる。

このように続けさせてもらった収集の中で自分で大切にしているものがクリスマスカードの封書である。その封筒には切手(クリスマス切手は1967年より)は当然ながら毎年、異なるクリスマス消印が押印されている。(図1)消印も30余種類あると楽しいものである。この消印を説明するとデザインは毎年変わるが表示されている4411という番号はクリスマス期間にのみ使用される郵便局のコード番号で30年間変

図1 オーストリアのクリスマス消印



化していない。オーストリアでは古くから消印には地域郵便局のコード番号が刻まれている。友人住む GRAZ という都市では 8010, 8020-8055 という番号が使用されている。また、小さい番号はデザイン番号であるという。おのずからクリスマス消印収集家が存在するのであろう。時間を見つけてインターネットなどで探索してみたいと思っている。

ふと封書を裏返してみるとそこに東京国際空港郵便局(羽田空港)の消印が押されている。投函から空港到着までの必要日時が一目瞭然である。ただし、当時と今を比較してもあまり差はないようである。

さて、ひさびさにアルバムを手にして感じるのは両国とも年毎に切手の種類はともかく色彩が豊かになり、昔の面影がなくなってしまうことである。しかし、日本とオーストリアでは感じ方が違うので

何年ぶりかの Scott をひも解くまでもなく、印刷方式が大幅に変化している結果であった。この印刷方式の変化を1955年から97年までの42年間の特殊切手(日本は公園、年賀、地方切手を除く)に絞って整理してみたのが図2,3である。両国ともグラビア印刷にシフトしているがオーストリアが伝統の凹版をグラビアに加えている点が異なり、それが自ずと切手の品格に影響しているのかと考えさせられた。凹版の原版を完成させるのには名工が2-3ヶ月を要するといわれると今の切手発行状況では困難さは否めないが年に2,3種類はぜひ日本でも発行してほしいものだと感じている。

図2 オーストリア特殊切手の印刷方式の推移

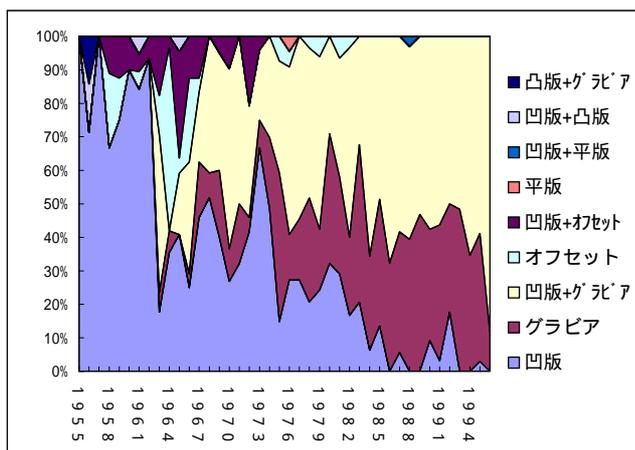
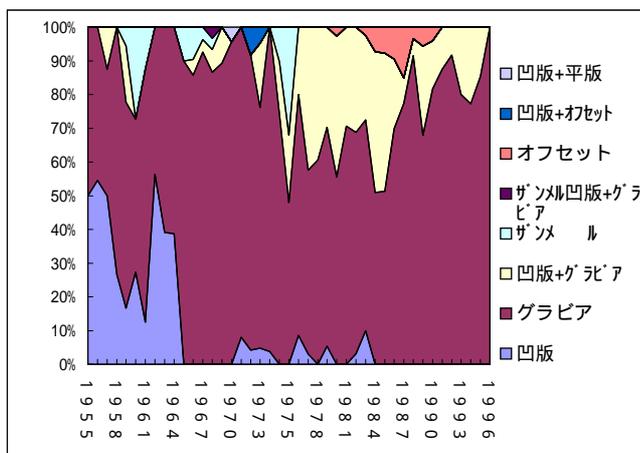


図3 日本特殊切手の印刷方式の推移



切手収集をかりうじて続けて思わぬ国際交流(?)に役立てることもできた。地球の割れ目が地上に現れ、その地形に加え氷

河から火山、間欠泉が得意な景観を見せていることに興味を持ち、その景観と自然の猛威が切手にも表現されているアイスランドを先年訪ねた。厳しい気象条件の石と岩の荒野をほとんどオフロードのような行程を楽しんでいたときひょんな縁でフェア

図4 アイスランド荒野を馬で郵便を運ぶ



テリストと知り合い、自宅に招かれ切手談義ができた。そのときに1枚のカードを頂いた。月面をほうふつさせる荒野にケルンのような石積みが見られたがそれを道標に郵便事業を維持してきたことを記念するカードであった。(図4)一枚の切手にこのような生い立ちを持ったものがあることを思い起こさせてもらった。どんなスタンプを押された切手にも生育歴があること思い、時に切手に話かけたくなる。

先日、前述の友人から第二の人生に入ったという知らせとかなりのカタログを脇にピンセットを片手に机上の切手を重厚なアルバムに整理している姿の写真を送ってきた。まことに教養の豊かな人生を感じさせる壺葉である。我が切手収集も郵~趣~の美をどうまとめるかアルバムのアレンジに頭を悩まされる。